

ルデレはラテン語で、遊ぶ、演奏する、語る、楽しむなどを意味することばです。  
ギターを手に心を語り、クリエイティブに音楽表現を楽しむ、そんな想いが込められています。

2021  
春  
第4号

# 第102回 定期演奏会開催



## 第2回長崎ギター音楽院 ギター短歌・川柳コンテスト

大賞（各1作品）、優良賞（各1作品）  
奨励賞（各3作品）

ギターのある生活にまつわる、ふとした想いと笑いが詠まれた一句一句、共感と激励の気持ちを持って読ませていただきました。相変わらず音楽院勢の作品は字余りなど気にもとめない様子、短歌なのか川柳なのかよくわからない句も多数でした（笑）以下に、各部門5首ずつの院長選を掲載します。音楽院ウェブサイトに全応募作品が掲載されていますので、ぜひそちらもご覧ください。次回も、多数のご応募をお待ちしています！

### 短歌部門

#### 大賞

憂きことの あまたを内に 握り込めし コブシ聞いてギターに向かう（平野宏）

#### 優良賞

ギター弾く 少女の姿 うるわしく いずれにたとう 梅桃桜（パンチョ&しのぶ）

#### 奨励賞

ギター弾く 心からやか リズムよく（立山豊寛）

102回 支えに感謝 ご招待 親密たくさん 心がはずむ（佐藤純子）

高齢の 我にやさしく オケの人 「きこえてる？」 「ここからよ」 とは 助かるな（幼音）

### 川柳部門

#### 大賞

樂屋では、 ジュニア元氣で、 おにぎっこ。

シニアは次の、 樂譜とにらめっこ。（ゴッコおじさん）

#### 優良賞

妻は言う ギターを抱いた 粗大ゴミ（岩永俊三）

#### 奨励賞

ギタリスト 何年経っても 成長せず

このままでは リストラ対象（浜口征洋）

春の宵 ギター弾く手も おぼろ月（パンチョ&しのぶ）

君には弾いて 欲しくない くやし涙の J.S バッハ（長与ボイイ）

## 特別対談 Part 2

# 山口修氏 × 山下光鶴院長

山下亨前院長の愛弟子で、国際的に活躍し、また長崎でのギター音楽の普及に尽力してきた長崎ギター音楽院出身のギタリスト・山口修さん（以下、山口）と山下光鶴院長（以下、山下）が対談を行いました。前号からの続きををお送りします。



山下：修さんは、小学生の頃から亨先生のレッスンを受けられていたのですよね？

山口：小学5年生の頃からお世話になりました。当時私はかなり大変な登校拒否児でした。母は「学校休みたければ無理に行かなくてよい」って、私を甘やかしたものだから、私は図に乗つていろんな理由をつけては休み、ある時は母に内緒で学校へも行きませんでした。やる気もなくて・・・。その頃ちょうど兄がギターバンドチームの中、音楽に夢中で、ほっぽり出していたクラシックギターが家にあって、私はこれを鳴らしてみたい、習ってみたいと思ったんです。初めての息子のやる気にびっくりした母は、すかさず山下先生のもとへ連れて行ってくれて、それからは、ほんとに1日中ギターのことしか考えていませんでした。

当時の山下亨先生は、会社に勤めながらヤマハ音楽教室でギター講師をされてまして、レッスンが待ち遠しくてたまらぬ私は、バイクに乗つて向かって来られる先生を駅前の立橋の上からずっと待つて、先生が見えると一目散に教室に駆け降りお迎えしていました。

山下：ギターの虜になった修さんとギター講師として駆けだしたばかりの頃の亨先生の師弟の道はそこから続いているんですね。お2人の関係はその後長く続くわけですが、先生の教えのなかで特に印象に残っているのはどのようなことでしょうか？

山口：先生の教え方はまさに夢大きく、何方にもしっかりギターで音楽を表現させようとしてました。門下生3人でプログラムを組んでリサイタルをさせたりとか画期的な企画も続きました。

私は先生に、とにかくたくさんの曲をやりなさいと、毎週のレッスン毎に3曲ずつ暗譜の宿題をもらつてました。これがその後の私を大きく助けてくれました。「ギターのレパートリーは30才までに全部弾いてみなさい、どれだけの曲を知れるかであなたのこれからの道が変わってくる。」と。そんな先生は他にいなかったです。

ギター協奏曲についても作品数も少ないんだから全部やりなさいとおっしゃってました。

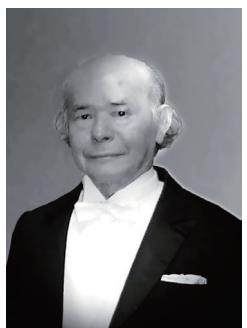
合奏団（現・長崎ギターオーケストラ）をバックにソリストとしてたくさん協奏曲を弾かして頂いた。お陰で私は、いろいろなオーケストラと共に演させて頂いても、アンサンブル、合わせるということが苦痛になったことがなかったです。

山下：なるほど、合奏団と一緒にいろいろな協奏曲に取り組まれたんですね。

山口：最初は、バッハのバイオリン協奏曲ホ長調。オイストラフ（注：20世紀の名バイオリニスト）のレコードを聴かせてくれて、「こんな曲ですよ、素晴らしい曲でしょ！」って始まって、それ以降、合奏団も盛り上がって、本当にたくさんの曲をやらせて頂きました。それこそ「アランフェス協奏曲」が弾ける夢も実現しました。気心の知れた合奏団で、正にオーケストラ気分。楽器の「対話」や「響

き」が聴こえてくるようになってきたりとか、いろんな発見がありました。

山下：長崎ギター合奏団のギターでもって交響曲を弾くというのは、本当にすごい情熱であるな、そしてなんと豊かな経験であるかと僕もつくづく思うのですが、亨先生は、そこらへんどんな想いを持ってはじめられたんでしょう？



▲故山下亨先生

山口：やはり、ギターだけでは出会わない作曲家とか音楽の規模とか、そんな音楽を知らないギタリストは不自然だと山下先生は考えておられました。

オーケストラの音楽に触れ、「作品が素晴らしいから研究してみなさい」と。そして、それだけの表現が出来る事がギターのこれからーの使命の1つなんだ。まさに山下和仁さんの偉業はこれから始まったと思います。

朝の音楽院の扉を開けると、よく NHKFM 放送の山下先生のお気に入りの番組で、オーケストラの演奏が流れていきました。耳に飛び込んでくる生き生きした音楽は凄い衝撃でした。

オーケストラ曲から学ぶ表現力はかけがえのない経験でしたし、そこで山下先生がご自分で勉強なさっている姿勢にも又感動でした。

音楽院出身の皆さんには音量の大きい方が多いですが、先生はギターの魂ある音は必ずドカンと心に響くと、少々傷があっても良いから、思い切って弾きなさいと。そう山下門下は育てられましたね。当時の合奏用ギターは未だ開発途中で、アルトギター専用弦も手に入らず、釣り糸を、山下先生が何号はどうでと、熱心に研究されてました、でもそこから出てくる音楽には本当にわくわくの連続でした。ギター合奏でのトレモロ奏法にしてもオーケストラのイメージに倣って、瞬発力と緊張感溢れる、生き生きした音楽へと皆まさに燃えてました。

相当な情熱がないと、とても継続出来ないことです。立体的な響きが聴こえてくるまでには、大変な苦労がいるわけですね。それだけにやる価値がある。出てくる音楽には本当に人間味豊かなものがある。

山下：本当に当時は楽譜を作るのも大変な作業だったんですよね。今のコンピュータを使っての楽譜作成でもなかなか大変なことに以前はそれこそ手作業ですものね。

山口：光鶴さんの作られた楽譜はほんとに見やすくてイメージも分かり易く、やる気が出る。

昔は青焼き（今のコピー技術以前に主流だった複写技術。現像が青色の濃淡として写るためこのように呼ばれる。）で細かく手書きされていて、傷んだ原版を、セロテープで紺創膏みたいに修復しては複写を繰り返したもので、加線の数なんか何本あるかほとんど分からなくて、勘で弾いてました。

以前のギター合奏団の手書きのパート譜は、音符の玉も書き方も違っていて、字がとても小さかったり、ページ数稼ぐために、とにかくギュウギュウにつめて書いてあったりと、人間味溢れるものでした（笑）。

山下：そうですね、合奏団はまさに亨先生が団員とともに情熱を燃やして創ってきた活動、僕も音楽院に残っている手書きの楽譜なんかを見ているとジーンとくるものがあります。

音楽院にある、まさに大きいものをやりたいという気概ですが、それこそ残念ながらコロナで実現しませんでしたが、修さんが最近やろうとされていた「ベートーヴェン、チャイコフスキイの2大協奏曲を弾く」というコンサートなんか本当にすごいなと思ったのですが、そんなのもやはり亨先生と修さんとの歩みあって思い立たれしたことだったのでしょうか？

山口：計画することは自分の能力にいつも分不相応な私でしたが、「いつも何かに挑戦していなさい」、「しっかりした哲学を持って演奏者として生きていなさい」と言われた山下先生のお言葉は心にしっかりと残っています。

当時高校生の私には哲学も何もなかったですが（笑）。主張のない芸術には感動が無いとか、画廊に飾ってあったビュッフェの絵を指さしてこんな風に弾きなさいと諭されたりとか、山下先生の発想とそれを人につたえようというエネルギーは本当にすごいものがありました。

合奏団の演奏会本番は情熱溢れるばかり、まさに尻上がりのスピード、どんどんフォルテに…仕方なく何小節も先にいって待ってたなんてこともあったくらいでした（笑）。燕尾服を着た先生の姿には、その心意気、精神力がみなぎっていて、先生のパッション溢れる指揮を見てみな本当に感動してました。

サロンコンサート（音楽院内の発表会）の際、先生は必ず正装でした。生の音楽を本当に大切にしておられた。私の演奏もたまたま上手くいくと、先生が本当に嬉しそうな顔をして下さって、また次回は一生懸命準備しようと思って頑張りました。先生がコンサートで楽しんでおられるのが、これ以上ない誉め言葉でした。

山下：本当に先生のギラギラした視線というのは今でも目に焼き付いていますね。並々ならぬ情熱、自らのしていることを根本的に考えて本質を見抜く、そういうエネルギーを持った人だったんだなと思います。それこそ当時そういう風潮はなかった中で作曲コンクールも立ち上げたりとか。先見の明あってのことだと思

います。僕も作曲をしているということを非常に期待してくれているという実感があって励みになっていました。

山口：そうですね。当時、小船幸次郎（作曲家／指揮者・横浜交響楽団を創立）先生を何度も九州にお招きして皆で勉強会を作つて下さって、それから、作曲家の吉松隆（日本の現代音楽を代表する作曲家）さんや、濱田滋郎（著名な音楽評論家／スペイン文化研究家）さんの講習会だと、山下先生の人には真似できない程の信念と情熱には驚くばかりです。私達が、もうこれで十分、いいじゃないですかって言いたくなる時も、「いや、まだいかん」と首を振られ、本当に厳しかった。山下先生がおられなかったら、長崎のギターの道は切り開いていけなかったと思います。原点回帰、再びギター音楽を「光鶴号」で！これからも音楽院に心を向け、皆で力を合わせ、山下亨先生の想い引き継いでいけたらと思います。

山下：ありがとうございます。音楽院が人々の想いを集めながら、さらに豊かな音楽のある場所になるよう精一杯がんばっていきたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願ひします。

#### 【山口修氏プロフィール】

山下亨、小船幸次郎、ホセ・トーマス、アリリオ・ディアスの各氏に師事。

スペイン、イタリア、フランス、ヴェネズエラの国際ギターコンクールで優勝。多くのオーケストラと共に演し、中でも日本フィルハーモニー交響楽団とは国内、ヨーロッパ公演に至る約80会場を回る。CD「山口修 / シャコンヌ」はレコード藝術特選盤となる。

長崎記念病院「さわやかコンサート」は300回を超えた。FM長崎「日曜音楽館」パーソナリティ。平成音楽大学非常勤講師。九州ギター音楽協会会長。

## レッスンクローズアップ ルンバで開拓 ギターパーカッションの世界

ギターは工夫次第で本当にいろいろな音が出せる楽器。パーカッション系の特殊奏法もラテンやフラメンコ、また実はバロックなど古楽の時代のギター音楽にも積極的に取り入れられ発展してきました。パーカッション系の奏法は弾いていても楽しいですし、いろいろな角度から楽器にアプローチするので楽器の構え方がフレキシブルになったりと、その他のギターのテクニックの上達にも多大な効果があるので是非チャレンジしてみてください。今回は、最近音楽院のジュニアアンサンブルやラテンアンサンブル（2月より大村でも開講しています）で弾いている「コーヒールンバ」などでも活躍するルンバのリズムセクションで使える奏法をご紹介します。

クラーベは、ルンバやソンなどのキューバ系の音楽の核となるリズムでクラバスと呼ばれる拍子木のような楽器で叩かれます。マルティージョは、ギロなどでシャカシャカと鳴らすリズム。カスカラは、中音域の明るい音で叩かれるリズム。トゥンバオは、ベースラインなどのリズムにも取り入れられることのある、コンガなどの低音パーカッションが担当するリズムです。4パートが揃うと、それだけでなかなかおもしろい音の世界が生まれます。

The musical notation consists of four staves, each representing a different percussive technique on a guitar. The top staff is labeled 'Clave' and shows vertical strokes and downward arrows indicating where to tap the strings. The second staff is labeled 'Martejo' and features square-like patterns with dots and circles. The third staff is labeled 'Cascarrilla' and includes 'X' marks and vertical strokes. The bottom staff is labeled 'Tunba' and shows square patterns. The notation is divided by a vertical bar line.

#### 【クラーベ】

指の関節部分で表板を叩く。  
「コンッ」という音。



#### 【マルティージョ】

左手でミュートした状態で、弦上を上下に「シャカシャカ」とストロークする。



#### 【カスカラ】

左右の手で弦上を叩く  
「チャッ」という音がする



#### 【トゥンバオ】

弦をミュートした状態で、弦上を叩く。  
「ポンッ」という音がする。



# コンサートレポート 第102回長崎ギター音楽院定期演奏会

一昨年の10月に第101回定演が開かれて以来、コロナ禍の影響によりコンサートを開くことが出来ず、1年半振りにようやく第102回定演を開催することができました。紙面の都合上、2,3の特筆すべき点のみをピックアップして御報告したいと思います。

ひょっとすると今回の演奏会で一番拍手が多かったかも知れないのが、ジュニアアンサンブルの「マリネラ」です。それぞれかわいいらしい衣装に身を包んだ小学4年生の女の子3人と小学1年生の男の子達、思わず会場から「かわいい！！」の声が漏れます。南米の賑やかなリズムとメロディーに乗って、子供らしく楽しい演奏にみんなが聞きほれています。次回の演奏が大いに楽しみです。

ラベルの「亡き王女のためのパバース」は昨年11月に逝去された、長崎ギター音楽院の前院長、山下亨先生へのレクイエムとして捧げられたものです。それぞれのメンバーが前院長の思い出を噛みしめながら奏でた、とても美しく胸に響く演奏でした。特にゲスト演奏者の山口修や橋口武史を含め、長年前院長の教えを受けてきた人や会場で聞くOBの方たちにとっても感慨深いものがあったことでしょう。

アンコールで演奏したアルゼンチン民謡の「花祭り」では、はからずとも手拍子が沸きあがり、和やかな雰囲気で演奏会が無事終了いたしました。

今回が光鶴先生の統括する実質的な最初の定演となりましたが、それに至る準備段階から、当日の舞台セッティング、リハーサル、そして本番ではほとんどのアンサンブルに参加しての演奏、指揮、プログラムにはないソロ演奏、舞台袖では手抜かりのない段取りと、実に八面六臂の活躍でした。心より「お疲れ様」と言いましょう。そして次の演奏会が今回に増して素晴らしいものになるよう、光鶴先生をリーダーに、みんなで作り上げたいと思っています。(文:峰敏信)



▲ジュニアアンサンブル



▲亡き王女のためのパバース



▲ジュニアも参加してアンコール

# グランプリレポート 第5回長崎ギターグランプリ



2021年3月21日(日)長崎ギター音楽院サロンにて第5回長崎ギターグランプリ本選会が開催されました。コロナ禍のため再々延期(当初は昨年4月の実施を予定)された今回の本選会では、昨年3月に予選審査を通過した6名の演奏による12作品が披露され、坂元敏浩さん、橋口武史さん、平戸健吉さん、山口修さん、山下光鶴さんら5人による選考の結果、次の通り受賞作品が決まりました。【グランプリ受賞:さくらの主題による変奏曲(横尾幸弘作曲 演奏:岩崎美保)】2位受賞:《コンポステラ組曲》よりプレリュード(F.モンポウ作曲 演奏:岩崎美保)3位受賞:マリエッタ(F.タレガ作曲 演奏:佐藤純子)】

グランプリおよび2位を獲得された岩崎美保さんは、一音一音に対する研ぎ澄まされた想いが伝わってくる演奏で聴くものを洗練された雰囲気のなかに誘い込む表現が印象的でした。岩崎美保さんには、今秋9月21日の長崎ギター音楽院定期演奏会にて演奏をご披露いただきます。また3位を受賞された佐藤純子さんは、作品の中での「歌うこと」への追求と曲の構成への真摯なアプローチが演奏に良く表れていました。

本選会後の表彰式では受賞者のコメントと、長崎ギター音楽院新院長・山下光鶴さんより各演奏者に対して作曲家、表現者としての観点での講評があった後、山口修さんより、演奏者に対する労いと、故山下亨氏の意思を引き継いでこのグランプリを続けていきたいという決意の言葉がありました。次回の長崎ギターグランプリ開催の詳細については、今夏あらためて発表させていただきます。

※今回の本選会実施にあたっては無観客での開催に加え、各方面の協力を得て、換気をした広い控室をご提供いただきたい、各演奏の後に十分な時間を空けるなどを取るなどの感染防止対策を徹底しました。

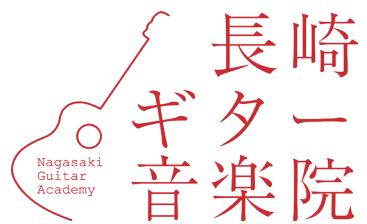
◀(上) グランプリ曲「さくらの主題～」を演奏する岩崎さん (下) 本選会参加者と審査員



# ライブラリーブース新設

音楽院入って左の部屋、長いあいだ倉庫同様になっていたのですが、昨年から順次片付けを進め「ライブラリー」に様変えしました。音楽院蔵書の楽譜の数々(教則本・専門書やCDもあります)をジャンルごとに分けて置いてありますので、どうぞ自由に閲覧してください!販売している楽譜も多数あります。

左の壁面には、ギタリストを中心にいろいろなジャンルのミュージシャンの写真を貼っています。クラシックや各国folkクローレ、ポップスなどの多彩に活躍する個性派のギタリスト達。ギターと音楽のなんとも豊かな世界に触れるきっかけになるよう、今後も続々貼り足していくたいと思います。



Tel: 850-0035  
長崎県長崎市元船町7-4 松永産業ビル2階  
Fax: 095-823-2766  
<https://www.nagasaki-guitar-academy.com/>

長崎ギター音楽院会報誌 Ludere  
発行日: 2021年5月1日

発行: 長崎ギター音楽院

STAFF  
監修: 山下光鶴  
編集長: 池浦恒信  
編集・デザイン: 内村灯

